

不登校傾向にある児童に対する支援の工夫

—情報共有ファイルを活用した連携を通して—

教育相談室 長期研修生 養護教諭 西山 真奈美

【要 約】

不登校傾向にある児童の支援において、学級担任、養護教諭、保護者等の支援者で共通理解を図ってきたが、更に支援者間の連携を深める必要があると考えた。本研究では、支援目標と支援者の役割を明確にし、情報共有ファイルを作成・活用して支援を進めた。その結果、支援者は児童の理解をより深め、連携を充実させて効果的な支援を行うことができた。児童も、スモールステップで課題を克服し、不登校傾向の改善及び学校生活への適応力の向上につながった。

【キーワード】 不登校傾向にある児童 連携 情報共有ファイル スモールステップ

1 研究の目的

文部科学省が毎年実施している調査によると、令和元年度の不登校児童数は53,350人と、前年度の44,841人から19%増加しており、不登校は小学校が抱える喫緊の課題の一つである。これまでも、不登校傾向にあって、保健室で過ごすことが多くなった児童に対し、児童の心身の状態に応じた段階的な支援を行ってきた。その際、養護教諭の立場から、学級担任と保護者をつなぎ、共通理解を図ってきたが、その手段のほとんどが口頭による情報共有であったため、支援の方向性にずれが生じる等、連携の不十分さを感じていた。

そこで、不登校傾向にある児童（以下、「対象児童」という。）の支援目標や、学級担任、養護教諭、保護者（以下、「支援者」という。）の役割を明確にし、情報を共有するツールを活用して連携すれば、対象児童への理解がより深まり、確かな共通理解に基づいた効果的な支援となって、対象児童の不登校傾向の改善及び学校生活への適応力の向上につながるのではないかと考え、本研究に取り組むこととした。

2 研究の内容

(1) 文献等による研究

ア 不登校の行動アセスメント

不登校の行動アセスメントとは、不登校状態を形成し、それを維持している条件を明らかにし、再登校行動のシェーピングに当たって必要とされる情報を収集することである（小林、1988）。シェーピングとは、複雑で新しい行動を獲得させるために、標的行動をスモールステップに分け、達成が容易なものから順に形成していく方法である。

イ 子ども参加型援助チーム

教師、保護者、コーディネーターで結成する援助チームに、当事者である子どもが直接的、若しくは間接的に参加する形態である。

(2) 実態把握

ア 児童に関する実態

研究協力校の対象児童2名と支援者に対して聞き取り調査を行い、不登校の行動アセスメントから情報を統合して支援の検討を行った。

イ 連携に関する実態

支援者に対して連携に関する意識調査を行った。支援者間で情報交換をしながら支援が進められていたが、各自が大変さを抱えていた。

以下、その主な内容である。

【学級担任】

- 対象児童への接し方や自分の役割に迷うことがある。
- 情報交換の時間の確保が難しい。
- 記録を残すことが難しい。
- 本人や保護者がどのような関わり方を望んでいるのか分かりにくい。

【保護者】

- たくさんの方と情報を共有するため、何度も同じことを話すのに少し負担を感じる。
- 本人のペースを大切にしようと思いつつも待ち続けることが難しく、自分の対応がぶれていると感じることがある。

【養護教諭】

- 来室者への対応等で対象児童と関われない時間が多く、関係づくりが進まない。

(3) シートと情報共有ファイルの作成

子ども参加型援助チームで支援を進めることとし、3種類のシートを作成した。

「支援計画シート」は、支援目標や支援者の役割を明確化できるように作成した（図1）。対象児童と支援者で目標を共有するため、対象

児童にも分かりやすいように、短期目標は「ステップ」と呼ぶこととした。

支援計画シート		学年	組	(ふりがな) 氏名
作成日：令和 年 月 日 () 記入者：				
思いや願い	本人			
	保護者			
本人の様子	好きなこと 得意なこと			
	困っていること 苦手なこと			
長期目標				
目標設定日	短期目標 ステップ1 (/ ~ /)	短期目標の評価 (達成◎・継続○・見直し●)		
役割分担	支援の手立て	経過・評価 (達成◎・継続○・見直し●)		
学級担任 ()				
養護教諭 ()				
保護者				
評価日：令和 年 月 日 ()				

図1 支援計画シート

「ステップアップシート」は、支援計画シートの内容を対象児童にも分かりやすく反映できるように作成した(図2)。

(ステップアップシート)		
ステップ5: (月 日)		
ステップ4: (月 日)		
ステップ3: (月 日)		
ステップ2: (月 日)		
ステップ1: (月 日)		
○○さんの気持ち		
○○先生 (学級担任)	○○先生 (養護教諭)	おうちの人

図2 ステップアップシート

「活動記録シート」は、対象児童の1日の様子を記録し、対象児童と支援者で情報を共有するために作成した(図3)。対象児童は、「登校したときの気分」「今日の予定」「帰る前の気分」「今日の自分のよかったところ」を記入し、学級担任と養護教諭は、自分が関わった時間に対象児童ができたことや良かったことを記入する。保護者は、家庭でできたこと等を記入

するようにした。なお、活動記録シートの形式は、対象児童の実態やステップの内容に合わせた方がスムーズに支援を行うことができると考え、修正しながら進めることとした。

〈活動記録シート〉		ステップ1	
月 日 ()			
★登校したときの気分 (とてもいい…10 ☺)		1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	
登校	1 おうちの人と登校	2 おうちの人と集団登校	3 集団登校
時間	教科	今日の予定	結果
1		教室・保健室・別室 その他 ()	教室・保健室・別室 その他 ()
2		教室・保健室・別室 その他 ()	教室・保健室・別室 その他 ()
3		教室・保健室・別室 その他 ()	教室・保健室・別室 その他 ()
4		教室・保健室・別室 その他 ()	教室・保健室・別室 その他 ()
	給食	教室・保健室・別室 その他 ()	教室・保健室・別室 その他 ()
	清掃	教室・保健室・別室 担当場所	教室・保健室・別室 担当場所
5		教室・保健室・別室 その他 ()	教室・保健室・別室 その他 ()
6		教室・保健室・別室 その他 ()	教室・保健室・別室 その他 ()
下校	1 おうちの人と下校	2 おうちの人と集団下校	3 集団下校
★帰る前の気分 (とてもいい…10 ☺)		1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	
今日の自分のよかったところ		おうちの方から	

図3 活動記録シート

情報共有ファイルは、ステップアップシートと活動記録シートで構成し、ステップの達成状況や日々のできたことがファイルに蓄積されていくようにした。

(4) 実践活動

ア 事前打合せ

支援計画シートを用いて、支援者で対象児童の支援目標とそれぞれの役割を設定した。対象児童は、事前に保護者が本人の思いや願いを聞き取る形で、間接的に参加した。

イ 日々の支援

情報共有ファイルを対象児童と支援者で共有し、毎日1枚の活動記録シートに各自が記入した。1日の中で対象児童のできたことや良かったことを本人と確認しながら支援を進めた。

ウ 定期的な検討会

ステップの内容に合わせて達成までの期間を設定し、その期間が終了する頃に支援計画シートを用いて支援者でステップと各自の役割について評価を行った。対象児童の考えを反映させながら、次のステップと役割を設定した。

(5) 実践の検証

ア 児童の変容について

(7) 低学年対象児童

ステップを達成するごとに学校生活への適応力が向上し、長期目標の「学級で落ち着いて学校生活を送ることができる」を達成することができた(表1)。

表1 低学年対象児童のステップの経過

長期目標：学級で落ち着いて学校生活を送ることができる。		
期 間	ステップ	役割分担
9/1～9/11 (2週間)	1 8時までに教室へ行く。	養教：登校時の気分の確認。 学担：一緒に教室へ行く。 保護者：良いところを一緒に見付ける。
9/14～9/25 (2週間)	1 8時までに教室へ行く。	養教：登校時の受け入れ。 学担：一緒に教室へ行く。声を掛ける。 保護者：良いところやできたことを確認する。
	2 ①体育のときは着替える。 ②(体育がない日は)8時半までに計画帳を書く。 ※①②どちらかでもよい。	
9/28～10/9 (2週間)	1 8時までに教室へ行く。	
	2 ①体育のときは着替える。 ②8時半までに計画帳を書く。 ※①②両方	
10/13～10/23 (2週間)	3 ・自分で歩いて教室へ行く。 ・荷物も自分で持つ。	
	4 授業中に読書をしなない。	
10/26～10/30 (1週間)	4 授業中に読書をしなない。	
	5 自分の良いところを見付けて自分で書く。	

実践前後に取り組んだワークシートの記述を比較すると、自己評価や学校生活への意欲について向上が見られる(図4)。保護者からは、「子ども自身ができることに気づき、自分を肯定できるようになった」という意見があった。

【実践前(7月・8月)】 【実践後(ステップ4終了時:10/23)】

① 1学期を振り返って → 9/1～10/23までを振り返って

② どのくらいできたか、こみきゃんを○でかこみましょう。

① ともだちとなかよくできましたか。	がんばった	がんばった	がんばった
② はじめてのことにチャレンジしましたか。	がんばった	がんばった	がんばった
③ わからないことは、しつもんできましたか。	がんばった	がんばった	がんばった
④ すずんでんきょうやうんどうをしましたか。	がんばった	がんばった	がんばった

図4 ワークシートの記述内容の変化

これらのことから、以下の2点が対象児童の自己肯定感を高め、学校生活への適応力を向上させたと考えられる。1点目は、対象児童と話し合いながら無理のないステップを設定したことにより、成功体験を積み重ねることができたことである。2点目は、日々の生活の中で対象児童

のできたことや良かったことを支援者が本人と確認し、それらを認めていったことである。

(4) 高学年対象児童

ステップの達成に向けて主体的に取り組み、着実に達成していくことができた(表2)。

表2 高学年対象児童のステップの経過

長期目標：登校のリズムを整える。体験や友達との関わりを増やす。		
期 間	ステップ	役割分担
9/1～9/11 (2週間)	1 ①集団宿泊行事(それに関連する授業)に参加する。 ②校時帯に合わせて家庭で1時間、学習に取り組む。	学担：計画帳や集団宿泊行事のことを知らせる。 養教：活動記録シートの確認。学級担任への連絡。 保護者：家庭での確認。
9/14～10/10 (4週間)	2 ①運動会と運動会練習に参加する。 ※運動会練習は午前中 ②校時帯に合わせて家庭で2時間、学習に取り組む。 ※①②どちらかでもよい。	学担：計画帳や運動会のことを知らせる。 定期的なファイルを確認する。 養教と保護者は継続
10/13～10/30 (3週間)	3 ①自分が登校できる時間に登校する。 ②家庭学習1時間と手強い ※①ができないときは②	学担：計画帳とファイルの確認は継続。 参加できそうな授業への声掛け。 養教と保護者は継続

実践前の7月は13%であった出席率が、実践期間中の9月は65%、10月は59%と上昇し、過去2年間の9月、10月の出席率と比較しても、今年度が最も高い値であった(図5)。保護者からは、「小さな目標があることで、なんとなく登校するという感じから少し目的を持った行動に変化してきたように思う」という意見があった。過去の欠席の状況から、学校行事が登校の目標になりやすいこと、学校行事の後は欠席が続く傾向があること等を支援者で共通理解し、対象児童の気持ちを確認しながらステップを設定したことが、出席率の向上及び登校の継続につながったと考える。

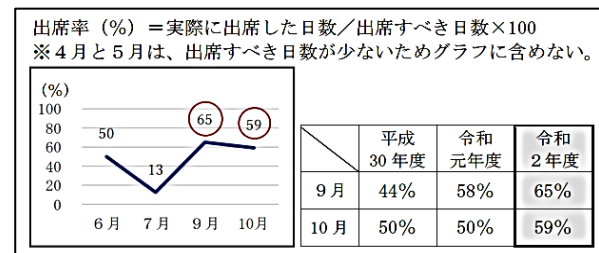


図5 高学年対象児童の出席率の変化
イ 支援者間の連携について

(7) 連携に関する意識調査結果の比較

「目標を共通理解して取り組むことができている」「役割分担をして取り組むことができている」の項目において、支援者5人中4人の数値が向上した。また、実践前は、支援について大変だと感じることを全員が記述していたが、実践後は5人中3人の記述がなくなり、残りの2人の記述からは、連携に関する課題の記述がなくなった。支援に関する気持ちの問いでは、

5人中4人の「孤独感」の数値が減少した(図6)。これらのことから、支援計画シートを用いたことで支援目標や役割が明確になり、支援者は確かな共通理解に基づいて支援を行うことができたと考える。また、情報共有ファイルを活用して対象児童の日々の様子を支援者で共有し、定期的な検討会においても情報交換を行いながら支援を進めたことが、対象児童への理解をより深め、支援者の孤独感の軽減につながったと考える。

質問	実践	低学年		高学年		養護教諭
		学級担任	保護者	学級担任	保護者	
1 児童の学校生活において、保護者・学級担任・養護教諭(以下、「三者」)が、支援についての目標を共通理解し、取り組むことができていると思いますか?	前	2	3	3	3	2
	後	4	4	4	3	3
2 児童への支援について、三者が役割分担をして取り組むことができていると思いますか?	前	2	3	3	3	2
	後	4	4	3	4	3
3 三者がそれぞれに行っている児童への支援で、良かったことや改善した方がよいこと等について、三者のうちの他の二者と話し合う機会がありますか?	前	3	3	3	4	3
	後	3	4	3	4	4
4 児童の日常の様子等について、他の二者へ伝えようと思ったが、伝えられなかったときはありますか?	前	3	2	2	2	3
	後	2	1	2	2	2
5 児童への支援に関して、他の二者と考え方の違いや支援の方向性のずれ等を感じることはありますか?	前	3	2	2	2	2
	後	2	2	2	2	3
6 児童への支援に関して「こうしたい」、または「こうしてほしい」という気持ちを他の二者に伝えることができているですか?	前	3	3	3	3	2
	後	3	3	2	4	2
7 児童への支援について、困っていることや大変だと感じることはありますか?	前	3	3	3	3	3
	後	2	3	3	2	2

児童への支援で、次のような気持ちをどのくらい感じますか?
(「とても感じる」を10、「全く感じない」を1として、現在の気持ち)

	実践	低学年対象児童		高学年対象児童		養護教諭
		学級担任	保護者	学級担任	保護者	
不安感	前	6	9	6	7	1
	後	2	6	7	2	1
孤独感	前	4	6	7	4	1
	後	2	3	4	3	1
疲労感	前	7	9	7	8	1
	後	4	8	8	3	2

図6 連携に関する意識調査結果の比較

(1) 活動記録シートについて

対象児童に関する情報が活動記録シートに集約され、その中から課題やリソース(資源)を見付けて次のステップにつなげた。支援者は、他の支援者の記述から対象児童の理解を深め、事実に基づいてできたことや良かったことを対象児童に伝えることができた(図7)。実践後の聞き取り調査において、高学年対象児童は、保護者からの言葉が「うれしかった」と答え、保護者の記述をよく見返していることが分かった。また、「活動記録シートが会話のきっかけになり、対象児童の理解につながった」「丁寧に記述してくださる先生に感謝している」という意見があった。これらのことから、活動記録シートの活用は、支援者間の連携を充実させ、対象児童と支援者及び支援者間のよりよい人間関係づくりに有効であったと考える。

図7 活動記録シートの記述

ウ 情報共有ファイルについて

支援者を対象に、情報共有ファイルの評価についてアンケート調査を行った。「共通の目標に向かって支援を行うために役立った」「連携の意識が高まった」の項目の評価が特に高く、支援者5人中4人が「そう思う」と答えた。一方で、「他の児童がファイルの中を見たがった」「忙しさや、他の児童の目が気になり、教室でファイルを確認するのは難しい」という意見があった。情報共有ファイルの活用の仕方については、対象児童及び他の児童への配慮と、支援者の負担の軽減を考慮しながら進めていく必要があると考える。

3 研究のまとめと今後の課題

対象児童の支援目標や支援者の役割を明確にし、情報共有のツールとして情報共有ファイルを活用したことで、支援者は対象児童の理解をより深め、連携を充実させて支援を進めることができた。その結果、対象児童の不登校傾向の改善や学校生活への適応力の向上につながった。

今後は、よりよい情報共有ファイルの活用の仕方や、次年度への引継ぎを踏まえた継続した支援の在り方について検討していきたい。

主な参考文献

- 文部科学省 『令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について』 2020
- 小林重雄 「登校拒否の行動論的アプローチ—再登校行動のシェーピング法—」 『日本心理学会第52回大会発表論文集』 1988
- 中島善明 ほか 『心理学辞典』 有斐閣 2005
- 水野治久 家近早苗 石隈利紀 『チーム学校での効果的な援助 学校心理学の最前線』 ナカニシヤ出版 2018